

### 鉄道人物伝

No.12

#### 鉄道林の父 本多静六



本多静六

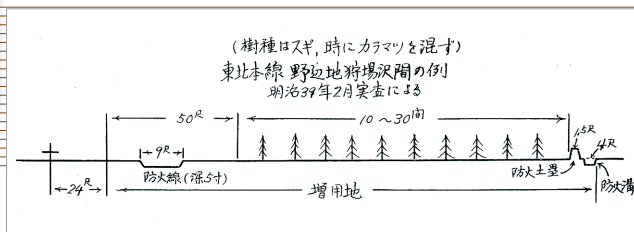
小野田 滋 / 情報管理部 担当部長

#### ■ 苦学を経てドイツ留学を果たす

本多静六は、埼玉県南埼玉郡河原井村（現在の久喜市）で農業を営み、地元の有力者でもあった折原禄三郎の六番目の子供として、1866（慶應2）年7月2日に生まれました。1876（明治9）年に父親が急死したため困窮し、一家は儉約生活を続けながら向学心の強かった静六を大蔵省の職員であった島村泰（静六の兄の藩塾時代の恩師で大蔵省に出仕していた）に預け、静六は東京の四谷にあった島村邸で書生をしながら漢学や英語を学んで、農繁期には帰郷して農業を手伝う生活を続けました。

18歳になった静六は、島村から設立されたばかりの官立の東京山林学校へ進学するよう奨められて受験し、50人中50番という成績でかろうじて合格しました。同級生の大半は中学で基

日本鉄道時代の野辺地防雪原林の断面図<sup>2)</sup>



礎教育を受けていたものの、静六にはその経験がなかったために苦勞し、一学期の成績で落第となってしまいました。周囲の支援に應えることができなかったことを悲観した静六は、井戸に飛び込んで自殺を図ったものの一命をとりとめ、島村に諭されてふたたび勉学に励むこととなりました。

1886（明治19）年に西ヶ原にあった東京山林学校は、駒場農学校と統合されて駒場に移転し、東京農林学校（現在の東京大学農学部）の源流）となって新たな環境で学生生活を続けました。この頃、元彰義隊の本多晋の一人娘であった詮子（銚子とも：日本における初期の女医のひとり）との縁談が進み、本多家の婿養子となりました。本多家からドイツ留学の資金を提供された本多静六は、新婚間もない1890（明治23）年に私費でドイツへと渡りました。

当時のドイツは林学の先進国で、最初にターラント山林学校で林学の基礎を学び、のちにミュンヘン大学国家経済学部へ転学して造林学、森林経営学、財政経済学を習得しました。この時期、ドイツに留学していた後藤新平<sup>8)</sup>とも接触があり、ドイツ語の学習に苦勞していた後藤のために家庭教師を斡旋するなど支援しました。1892（明治25）年3月にドクトルエコノミー（経済学博士）を授与され、アメリカ、カナダを経由して同年7月に帰朝しました。

#### ■ 日本最初の鉄道林

帰国後の本多は、ただちに帝国大学農科大学助教授となりましたが、ドイツ経済学の影響を受けてこの頃から「四分の一貯金」（給与の四分の一を貯蓄に回すというもの）や「一日一頁の文章執

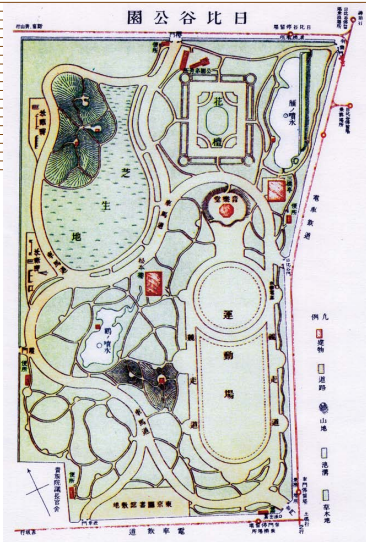
筆」（一日一頁の印刷価値を持つ原稿を書くというもの）を自らの義務として課す地道な蓄財術を実行し、のちに莫大な財産を蓄えました。

ドイツからの帰国時に、カナディアン・パシフィック鉄道で鉄道防雪林を視察した本多は、日本でもこれを実現することを思い立ち、同じ埼玉県出身で日本鉄道の役員をしていた渋沢栄一に話しを持ちかけ、1893（明治26）年、日本鉄道盛岡建築課長であった長谷川謹介<sup>9)</sup>のもとで現在の東北本線と青い森鉄道の水沢～青森間に野辺地防雪原林を含む41箇所（箇所）の日本最初の鉄道防雪林が誕生しました。

また、日本で最初の大学演習林として1894（明治27）年に千葉演習林を開設しましたが、単なる実習や研究を行うための場所ではなく、林業を営んでその収益を特別会計として大学の経営に充てることを目的としました。この思想は、ドイツで学んだ森林経営学に由来し、鉄道林も同様の思想で材木を業務用に再利用するとともに、のちに製材所を設けて収益事業としました。

1900（明治33）年、東京府の多摩川水源調査を囑託された本多は、東京府（現在の東京都）の顧問で東京帝国大学工科大学長であった辰野金吾を訪れ、辰野が構想を進めていた日比谷公園計画について意見を述べたところ、そこまで詳しいのであれば設計を任せたいという話に発展しました。本多はドイツの都市公園を参考として原案を作成し、1903（明治36）年に日本最初の西洋式公園として日比谷公園が完成しました。

1902（明治35）年には、日本鉄道社長（社長）の曾我祐準に対して鉄道用材と防雪林に関する提案を行ったところ試験研



現在の野辺地防雪原林(鉄道記念物)

完成時の日比谷公園平面図『東京案内・上』東京市(1907)より

模が縮小されたため一部が表現したにとどまりました。しかし、公園計画は復興局公園課

究を委嘱されたほか、1908(明治41)年6月には帝国鉄道庁からも鉄道防雪林および鉄道用材の調査を委嘱されました。この年には、東京帝国大学林学科を卒業した教え子の山田彦一が帝国鉄道庁に採用され、鉄道調査所(現在の鉄道総合技術研究所の源流となった組織)勤務・業務調査会議第11分科会付となって、本多の協力を得ながら防雪林計画案をまとめました。1909(明治42)年には成案が報告され、防雪林更新法、防雪林の幅、苗木の養成など、鉄道国有化後における営林の基礎が確立されました。

### ■ 公園整備から処世術まで

大正時代以後の本多は、全国の公園整備事業に携わり、1920(大正9)年に鎮座祭が行われた明治神宮では、造営局参与として原始林を人工的に再現した「神宮の森」を完成させました。また、1923(大正12)年に発生した関東大震災の震災復興事業を行うため帝都復興院(のち内務省復興局)が設立されましたが、総裁に就任した後藤新平は、復興計画の立案にあたって本多に協力を要請し、嘱託として勅任官待遇(現在の本省局長級に相当)で迎えられました。本多は、かつて後藤に説明したことがあるスペインのバルセロナの都市計画をモデルとして原案の作成に従事しましたが、予算の削減によって規

によってほぼ原案通りに進められ、隅田公園、浜町公園、錦糸公園などの都市公園が完成しました。

本多は、1927(昭和2)年に東京帝国大学を定年退官しましたが、1930(昭和5)年には秩父に所有していた山林を埼玉県に寄贈し、本多静六博士奨学金制度を発足させました。また同じ年には国立公園調査委員会委員として、翌年に成立した国立公園法の制定に尽力しました。「一日一頁の文章執筆」を自らの義務としていた本多は、生涯を通じて造林学に関する膨大な専門書を著しましたが、この頃から自身の体験に基づいて『成功の近道』(三浦書店・1929)、『子孫を幸福になす方法』(三浦書店・1929)、『幸福なる生活』(主婦之友社・1941)など、処世術や人生訓などの執筆にも手を広げました。

### ■ 鉄道林を救った意見書

戦後の本多は、静岡県伊東町(現在の伊東市)に在住して晴耕雨読の生活を過ごし、そのかたわらで執筆活動を続けました。1948(昭和23)年にラジオ放送で戦後の財源不足を補うために鉄道林の伐採計画があることが報じられました。本多はこれを再考するよう求めた長文の意見書を運輸大臣宛に送りました。本多はの中で「功は人に譲り、責は自らが負う」という信条のもとに、その功績は鉄道林を育てて

きた現場の鉄道職員たちにあることを指摘し、自らの責任において無報酬で指導にあたってよいと主張しました。

これに対して、当時の運輸省鉄道総局施設局長であった田中茂美から、鉄道林の伐採計画の報道は事実無根で、将来にわたって拡充する計画で、現在も鉄道林の保護と育成に努力していることを述べた返書がありました。1947(昭和22)年には札幌鉄道局に鉄道林を専門とする初めての組織として営林課が設立され、翌年には仙台鉄道局、新潟鉄道局にも営林課が設置されたほか、1951(昭和26)年には「鉄道林管理手続」、1954(昭和29)年には「鉄道林設置心得」が定められ(のちに「営林工事示方書」に統一)、国鉄における鉄道林の管理体制が整えられました。

処世術の執筆は戦後も続き、『人生百二十年健康長寿生活』(佐竹書房・1950)、『私の財産告白』(実業之日本社・1950)、『人生計画の立て方』(実業之日本社・1951)など多くの著書が出版し続けましたが、1952(昭和27)年1月29日に自伝の「自序」を書き終えた直後に他界しました。

### 文献

- 1) 本多静六：本多静六体験八十五年，大日本雄辨会講談社，1952
- 2) 鉄道技術発達史・第2篇(施設)Ⅰ，日本国有鉄道，1959
- 3) 鉄道に於ける営林技術発達史，日本国有鉄道施設局，1960
- 4) 島村誠，鈴木博人：鉄道林・成立経緯と施業の変遷，土木史研究，No.16，1996
- 5) 島村誠：野辺地防雪原林，土木学会誌，Vol.90，No.4，2005
- 6) 遠山益：本多静六・日本の森林を育てた人，実業之日本社，2006
- 7) 岡本貴久子：記念植樹と日本近代一林学者本多静六の思想と事績一，思文閣出版，2016
- 8) 小野田滋：初代鉄道院総裁 後藤新平，RRR，Vol.74，No.4，pp.38-39，2017
- 9) 小野田滋：鉄道技術の自立 長谷川謹介，RRR，Vol.54，No.2，pp.28-29，1997